

## 確証された約束

「アブラムは顔を地に伏せた。神は彼に語りかけて言われた。『わたしにあっては、見よ、わたしはあなたと契約を結ぶ。あなたは多くの国民の父となる。もはやあなたの名はアブラムと呼ばれず、あなたの名はアブラハムとなる。わたしはあなたを多くの国民の父としたからである。』」  
創世記 17:3-5

創世記の記述は、聖書を真摯に学ぶ者にとって極めて重要です。そのページには、人類の救い、そしてやがては地上のすべての氏族への祝福という、神の計画の基礎が記されています。したがって、私たちはその記述を注意深く検討し、聖書全体に見られる記録との調和を確認することが大切です。今回の考察では、創世記第16章、第17章、第18章に焦点を当てます。

これら三章において、後にアブラハムと呼ばれるアブラムに対する神の御業を学ぶ際、「子孫」に関する神の約束を心に留めておくことが重要です。アブラムには子孫が与えられ、その子孫は神の計画において重要な位置を占めることになっていました。この約束が最初にこの族長に与えられた時、彼の妻であるサライ（後にサラと呼ばれる）には子供がいませんでした。それにもかかわらず、二人は共に神の約束を信じ、子供が生まれるのを辛抱強く待ち続けました。しかし、子供は生まれませんでした。創世記16章1節

それは長い待ち時間でした。そもそも、約束がなされてから、彼らがカナン地に入る直前にアブラムの父テラが亡くなるまでの間に、かなりの時間が経過していました。それからさらに**10年**が過ぎましたが、依然として子供は授かりませんでした。サライは不妊である上に、すでに年を重ねており、約束の子の母となるという彼女の信仰は薄れ始めていた。どうやら、彼女は子孫に関する神の計画については依然として信じていたものの、自分がその母となることが神の御心なのかどうか、疑問を抱き始めていたようだ。

こうしたことを考え、可能であれば主に協力したいと願った彼女は、アブラムに、自分の女中であるハガルが彼の子の母となることを提案した。今日のキリスト教の基準からすれば、これは非倫理的な行為と見なされるかもしれないが、当時においては不適切とは考えられていなかったようだ。いずれにせよ、主はこの件についてサラもアブラムも叱責されなかったが、主はこの関係から生まれた子を約束の子とは認めなかった。創世記**16章2、3節**

しかし、世俗的な観点から見れば、サライの提案はこの問題に対する満足のいく解決策とはなりません。サライにとって全く予期せぬことでしたが、ハガルが子を宿すことを知るとすぐに、彼女は主人の妻を軽蔑し始めました。当時、子を産む能力は非常に高く評価されており、ハガルは明らかに自分がサライよりもはるかに優れていると感じ始め、それに応じて振る舞ったのです。創世記**16章4節**

サライはこの状況をアブラムに報告し、「私の不運はあなたに降りかかる」と叫び、この事態の責任をアブラムになすりつけようとした。（創世記16:5）。サライは当初、もしハガルが子を産んだとしても、自分が何らかの形でその子の養母となり、ハガルは母親としての権利を主張せずに身を引くものだと期待していた可能性が十分にある。しかし今や、サライはハガルの態度から、そのような取り決めには望みがないと悟り、アブラムのために子孫を得るためにこの方法を提案したのは賢明ではなかったと気づくに至った。

アブラムもまた、事態が期待通りに進んでいないことを悟り、サライへの忠誠から、彼女がハガルをどう扱うかについては、すべて彼女の裁量に委ねた。創世記16章6節によると、サライはハガルに厳しい仕打ちをしたが、おそらくそれは彼女の務めや仕事を増やすという形だったのだろう。一部の歴史学者は、当時の法律の下では、ハガルを売って手放すことは違法であったと主張している。したがって、おそらくそれが彼女の負担を増やした理由であり、彼女が家を出て逃げ出すことを期待していたのだろう。そして、まさにその通りになったのである。

## 神の介入

この時、主はこの件に介入された。主の御使い、すなわち使者は、「シュルへの道にある泉のそば」でハガルを見つけた。シュルとは、エジプトとカナンを隔てる巨大な要塞壁の名であった。明らかに、ハガルはエジプトにいる自分の民のもとへ戻ろうとしていたが、主が介入され、御使いを通

して彼女に、戻って女主人のもとに服従するよう命じられた。創世記 16:7-9

すると、その天使は驚くべき預言を語った。「主の御使いは彼女に言った。『わたしはあなたの子孫を大いに増やし、その数は数えきれないほどにする。……見よ、あなたは身ごもっており、男の子を産む。その名をイシュマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみをお聞きになったからである。』」（創世記16:10,11）歴史家たちは、中東のアラビア諸国の人口の大部分がイシュマエルの子孫であるという点で、ほぼ一致しているようだ。

ハガルは、主の御使いの訪問に深く感銘を受けた。天使が彼女を見つけた井戸はベエル・ラハイ・ロイと呼ばれており、ヘブライ語で「私を見守ってくださる生ける方の井戸」という意味である。ハガルは、主が自分を見守っておられたこと、また、アブラムとサライからは逃げ出したものの、アブラムの神からは逃れることができなかったことを悟ったようだった。彼女は女主人のもとに戻り、やがてイシュマエルが生まれた。創世記16:13-16

この出来事には、サライにとっても、そして主に仕えようと努めるすべての人にとっても、一つの教訓があった。それは、試練から逃げ出そうとしたり、無理やり追い払おうとしたりしても、何一つ成し遂げられないという教訓である。サライの信仰の欠如が彼女の人生に厳しい試練をもたらし、彼女はハガルを追い出してその試練を排除しようと考えた。しかし、主はその経験を彼女のもと

に再び戻された。おそらくこの経験は、ハガルの態度も和らげたのだろう。いずれにせよ、聖書の記録によれば、この後、二人の女性は15年から17年間共に暮らした。

## 神の契約の再確認

それから13年が過ぎ、創世記17章1節にはこう記されています。「アブラムが九十九歳になったとき、主はアブラムに現れて言われた。『わたしは全能の神である。わたしの前に歩み、完全であれ。』」アブラムが「完全」であるべきだという神の言葉は、より正確には「完全、あるいは正直」と読むべきである。アブラムは墮落し、死に向かっている人類の一員であり、行いの完全さは彼の能力をはるかに超えたものであった。それにもかかわらず、彼は主の前で正直であることはできた。これは神の民すべてにとって可能なことであり、これに満たないものは主にとって受け入れられない。

創世記17章2～8節において、神は以前結ばれた契約をアブラムに再確認させ、その特徴のいくつかをさらに詳しく説明された。神の計画の展開に関連して名前に込められた意味の重要性に即して、主は「高き父」を意味するアブラムの名を、「多くの民の父」を意味するアブラハムへと変えられた。契約の当初の宣言は、約束された子孫を通してすべての国々に祝福がもたらされることを保証していましたが、これらの節において、主はその考えをさらに深め、アブラハムが「多くの国々の父」となり、それによって祝福されることを約束されました。「父」という言葉は「命を与える者

」を意味し、これは、国々がアブラハムの子孫を通して受ける祝福が、すなわち「命」の祝福であることを神が説明された方法でした。

使徒パウロはこの約束を引用し、神がアブラハムに与えた約束に対して「アブラハムの信仰」を行使する者はすべて、それによって彼の「子孫」となる資格を得ると示しています（ローマ人への手紙**4:16-18**）。この子孫の中には地上の者もいれば天上の者もいますが、パウロが強調する重要な真理は、アブラハムの子孫となるために、必ずしもアブラハムの肉親の子孫である必要はないということです。

「あなたから王たちが生まれる」と、神はアブラハムに約束されました。（創世記**17:6**）。数世紀後、イスラエルの王たちはアブラハムの血統から生まれました。しかし、この約束の主要な成就是、アブラハムの霊的な子孫、すなわち頭であるイエスと、その体である教会に関連しています。（ガラテヤ人への手紙**3:16,27-29**；コロサイ人への手紙**1:18**）。イエスは王の王となり、その教会は彼と共に千年の間、王として統治するでしょう。黙示録**5:10; 20:6**

創世記**17:8**は、この時アブラハムがカナンに住んでいたにもかかわらず、彼はその地において「寄留者」、すなわち旅人であったと述べている。アブラハムは、神が彼に約束された地を所有することなく死んだ。イサクもヤコブもまた、その地を所有することはなかった。（ヘブル人への手紙 **11:8-10,13**）。それにもかかわらず、アブラハムの地上の子孫は、復活によって命に甦った時、その地を

所有することになる。神の約束のいくつかがどのように成就されるかを解き明かそうとする際、混乱や誤りに陥らないよう、神の御言葉を学ぶ際には、神の永遠の視点に留意することが最も重要である。

## 割礼——神の契約のしるし

創世記17章10-14節において、割礼に関する神の指示は、神とアブラハムとの間の「契約のしるし」として与えられた。パウロは、割礼を、アブラハムがすでに神とその約束に対して示した信仰の「しるし」であり、また、同じ信仰の歩みを踏むすべての人々のためのものとして語っている。ローマ人への手紙4章11、12節

新約聖書において、割礼は心の純粹さと目的の清さを象徴するものとして用いられています。これは、主がアブラハムに対して「正しい者」となるよう命じられた言葉に含まれる考えとほぼ同じものです。アブラハムの霊的な子孫は、文字通りの割礼の儀式を行うよう求められてはいませんが、心を清め、肉のあらゆる不純さを捨て去るよう戒められています。パウロは次のように記しています。「割礼とは、文字によるものではなく、霊による、心におけるものであり、人の称賛ではなく、神の称賛によるものです。」「あなたがたは、キリストの割礼によって、肉の罪の体を脱ぎ捨て、人の手によらない割礼を受けたのです。」ローマ人への手紙 2:29；コロサイ人への手紙 2:11

包括的なアブラハムの契約のしるしが割礼であることは、ふさわしいことです。割礼が何を意味す

るかという新約聖書の説明を考慮すると、主の御前で心と動機が清くあり、主の約束と律法の義に対する揺るぎない信仰に基づいて初めて、アブラハムの契約の下で約束された祝福を受けることができるということです。

## サライの名が変えられる

創世記17章に戻ると、15節と16節で主はアブラハムに、サライの名前をサラに変えることを明らかにされた。これは、彼女が王たちの母となることから、「高貴な女性」を意味する。使徒パウロは、サラが主によって王たちの母と見なされる理由について、彼女がアブラハムの霊的な子孫が育まれる契約を象徴しているからであると説明している。したがって、サラは、アブラハムが象徴的な父であるのと同じ王たちの母である。これらは、パウロが「約束の子ら」と呼ぶ王たちであり、地上のすべての氏族の祝福のために千年間統治することになる。ガラテヤ人への手紙4章22-31節

## 約束されたイサク

アブラハムは神の約束に対して大きな信仰を持っていましたが、それは完全な信仰ではありませんでした。時折、その信仰は揺らぎましたが、その一例が創世記17章17節、18節に記されています。サラが不妊であったにもかかわらず、神が最初に約束をされた時、アブラハムは、当時サラがまだ若かったため、彼女が息子を産むと信じる信仰を持っていました（ ）。しかし今や、不妊であることに加え、彼女は九十歳になっていました。主が

今回、サラが息子を産むと告げられた時、アブラハムは「顔を地に伏せて笑った」のです。

この箇所が示すように、アブラハムは心の中で、そのようなことが実現するとは疑っていた。そして地面から立ち上がり、主の前に嘆願した。「どうかイシュマエルがあなたの御前で生き続けますように！」。この嘆願の意図は、イシュマエルが約束の子となることにあるようだ。神はアブラハムに、イシュマエルは生き残り、大いなる国民の父となることを確約された。しかし、約束の子に関しては、サラが子を産み、その名はイサクとされ、彼が約束の契約の相続人となることが定められていた。創世記17:18-21

21節によると、イサクは「来年のこの定められた時期に」生まれることになっていた。これはアブラハムにとって極めて重要な時期の預言であった。彼は神が子孫を与えるという約束を果たされるのを長い年月待ち続けてきたが、その時まで、その待ち時間がいつまで続くのかについて、何の示唆も与えられていなかった。神は、この同じ「待ち」という試練を通して、御自分の民のほとんど全員の信仰を試されてきました。復活後のイエスに、弟子たちは「今こそ、イスラエルに王国を回復してくださるのですか」と尋ねました。イエスは答えられました。「父がご自身の権威に委ねておられる時や時期は、あなたがたが知るべきことではありません。」使徒行伝1章6、7節

期待される出来事が起こる時が近づくと、主はしばしばその秘密をしもべたちに明らかにされます。ノアは箱舟の建造に長い年月を費やしましたが

、おそらく洪水 がいつ来るのかという明確な見当もつかなかったでしょう。しかしついに主は、「七日後に、わたしは雨を地上に降らせる」と言われました。（創世記7:4）。今、アブラハムに対しても、主は「来年のこの定められた時」と告げられた。サラが息子を産む可能性は低いとアブラハムが心の中で考えていたことを踏まえると、主は彼の信仰を強める手段として、この明確な情報を与えられたのかもしれない。

創世記第17章の最後の節には、アブラハムが「契約のしるし」である割礼に関する主の指示に即座に従ったことが記されている。「その日」、彼は自分自身と息子のイシュマエルを含め、家中のすべての男子に割礼を施した。（創世記17:23-27）。聖書には、主が即座の従順を喜ばれるという多くの証拠があります。アブラハムの場合、この即座の行動は、サラに関する神の約束への信仰が回復されたこと、そして契約における自分の役割に関わるあらゆる細部を遂行したいと願っていたことを示唆しています。

## 神がアブラハムに現れる

マムレはアモリ人であり、以前、アブラハムが甥のロトを救出した際に彼に加わった人物であった。（創世記14:13）。創世記18章1節における「マムレの平野」という表現は、明らかにマムレが所有していた平野を意味している。なぜなら、アブラハムはその地における単なる旅人であったからである。しかし、どうやら彼はマムレをはじめとする多くのカナン人とは友好的な関係にあったようだ。

本文には「主がアブラハムに現れた」と記されているが、後にこの現れは、主の使者として遣わされた「三人の男」の訪問であることが明らかになる。（創世記18:2）。このような表現は、聖書において主が人類と関わる際、非常に頻繁に用いられている。人間には、神を見て生き残ることはできない。（出エジプト記33:20）。しかし、神が使者たちを遣わす際、神は、彼らが訪れる人々が使者たちを尊厳をもって扱い、彼らが伝えるメッセージを真剣に受け止めることを期待しておられる。

アブラハムを訪れたこの「三人の男」は、天使、すなわち霊的存在であり、族長と自由に会話できるよう、物質的な姿をとっていたのである。新約聖書において、使徒パウロは彼らをそのように呼び、また暗にアブラハムの歓待を模範として挙げており、「旅人をもてなすことを怠ってはならない。ある人々は、知らずに天使をもてなしたことがあるからである。」（ヘブライ人への手紙13:2）

## アブラハムの歓待

予期せぬ訪問者たちに居心地よく過ごしてもらいたいというアブラハムの強い願いを理解するには、彼の立場に立って考える必要があります。彼が住んでいたのは、毎日何千人もの人々が行き交う賑やかな大通りではありませんでした。むしろ、彼は「平原」のテントの中で暮らしていたのです。テントの前を通りかかる見知らぬ人が一人もない日が、何日も続くことも十分にあり得たのです。そこに三人の男が現れ、彼らは皆、相当な重要人物であることを示唆していました。

アブラハムにとって、これは特別な出来事であり、彼はこの機会を最大限に活かしたいと願っていた。アブラハム自身、その地域では重要な人物であり、物事を成し遂げたい時には指示を出すことに慣れていた。彼はサラに、この特別な訪問者たちのために食事を用意するよう な指示を出した。また、子牛を解体して食事の準備をするよう命じた若者に対しても、同様のことが言える。 創世記 18:6,7

アブラハムは、この三人の男の訪問に少なからぬ興奮を露わにした。記録によれば、彼は「群れのもとへ走って行き」、食べても柔らかいと分かっている子牛を自ら選んだと記されている。 主が遣わした使者たちによる訪問は、アブラハムにとって珍しいことではなかった。使徒パウロは「知らずに天使をもてなした」と説明しているが、アブラハムは、この三人の男たちが自らを明かしている以上の存在であると見抜いていた可能性は十分にある。いずれにせよ、彼は親切で気前の良いもてなし人であることを示し、サラも進んで彼に協力したようだ。

## サラへのメッセージ

アブラハムは客たちが食事をしている間、立ち続けていた。つまり、彼は使用人の役割を引き受けていたのである（創世記18:8）。食事中、三人の男たちはサラの行方を尋ねた。サラは食事の準備を手伝っていたものの、この時点までは明らかに姿を見せないようにしていたようだ。すると、訪問者たちの代表がアブラハムに言った。「来年の今頃、私は必ずあなたのところに戻ってくる。その

時、あなたの妻サラには男の子が生まれるだろう。」創世記18:10

どうやら、そのテントは男たちが食事をしていた場所から遠くなかったようで、サラはこの言葉を聞いて「心の中で笑った」、つまり、私たちが言うところの「独り笑った」のである。しかし、天使は彼女が笑ったことを知っており、後でそのことを取り上げたとき、サラは否定したが、天使は言った。「いいえ、あなたは確かに笑った。」創世記18:12-15

「主にとって不可能なことなどあるだろうか？」これが、この物語が私たちに与える実践的な教訓である。これは、神の計画が実現していく過程において極めて重要な点である。おそらく、主がイサクが生まれるまでアブラハムとサラをそれほど年老くさせた理由の一つは、すべての約束の成就に責任を負うのは彼らではなく、主ご自身であることを示すためであったのだろう。

今日のキリスト教界、そして過去何世紀にもわたり、人々は誤って、地上の神の御計画の成功が人間の努力にかかっていると考えてきました。そうではないこと、そしてアブラハムの子孫を通して地上のすべての氏族を祝福するという神の計画が確実に成就することを、私たちは皆、喜ぶべきです。一見するとその逆のように見えるあらゆる状況にもかかわらず、それは確実です。それは「私たちの魂の錨となる希望であり、確かで揺るぎないもの」なのです。ヘブル人への手紙 6章19節

## 神はアブラハムを試される

主は、ご自分のしもべたちを、彼ら自身や、彼らが特に心を寄せている人々に関わる事柄について、ご自身の内なる思いに招き入れてくださいます。大まかに言えば、真理に照らされた神の民は、全人類に関心を持つべきです。彼らはアブラハムの精神を持ち、神の計画——すなわち、アブラハムの子孫を通して地のすべての家族が祝福されるという計画——に対して熱意を示すべきなのです。

主は、ソドムの都の甚だしい悪行ゆえに、それを滅ぼすことを決心されていた。しかし、主はこの機会を利用して、アブラハムがその都の民、とりわけそこに住んでいた自分の親族であるロトとその家族に対する関心を試された。「私は、この計画をアブラハムに隠すべきだろうか」と主は尋ねられた。「アブラハムは必ずや大いなる、力強い国民となり、地上のすべての国民は彼を通して祝福を受けることになるからだ。」創世記18:17,18

この箇所は、神がご自分の僕たちが神の視点を理解できるよう、彼らの知的な限界に配慮してくださるといふ興味深い例を示しています。神がアブラハムに語られた言葉を言い換えるなら、それは、ソドムとゴモラの民が非常に邪悪であるという報告を聞き、それを調査するために下って来られたことを意味しています。もし彼らが報告通り邪悪であれば、神は間違いなく彼らを滅ぼすでしょう。もちろん実際には、宇宙の創造主であり、天と地の神である神が、必要な情報を得るために自ら地上を訪れる必要などなかった。これは単に、

アブラハムの理解力に合わせて語られたに過ぎない。

## アブラハムの執り成し

アブラハムは、主がソドムとゴモラの滅亡を念頭に置いていることを明らかに察知していた。彼は、特にそこに義人が数人でもいることが判明したならば、その町を救うよう主へ熱心に懇願した。アブラハムは最初、義人が五十人見つければ町は救われるかと尋ねた。彼がその数をさらに減らし続けたのは、ロトとその家族のことを念頭に置いていたからかもしれない。創世記18:23-32

主は、アブラハムが人数を次々と減らしていく中でもその願いに応じることによって、アブラハムに対する忍耐と、憐れみを示そうとする御心を示された。結局のところ、必要な十人の義人さえ見つからなかったため、両都市は滅ぼされた。創世記19:24,25

これは、地上のすべての国々を祝福するという神の約束に照らして、重要な点を浮き彫りにしています。イエスは、ソドムとゴモラに対して悔い改めを促すための努力がなされなかったことを示しています。もしそのような努力があったなら、イエスは説明されたように、それらの町は残され、滅ぼされることはなかったでしょう。（マタイによる福音書11章23、24節）しかし最も重要なことは、イエスがまた、王国の裁きの日の期間において、彼らにも悔い改め、行いを改め、命を得る機会が与えられると説明されたことです。こうして、アブラハムに与えられた「彼の子孫を通して地

上のすべての民族が祝福される」という約束に調和して、彼らもまた、世界の他の者たちと共に記憶されるという事実の明確な例が見て取れます。この約束、そして神が人類に対してなされたすべての約束が、まもなく成就することを、私たちはどれほど待ち望んでいることか！